

翻刻 中西悦夫撮影 『開田村西野に於ける石井鶴三御制作の
「木曾馬」関係の写真集』
——木曾教育会木曾郷土館保管資料——

福江 良 純 (北海道教育大学)

本稿は、木曾教育会(長野県木曾町福島)に保管される「木曾馬Ⅰ」、「木曾馬Ⅱ」制作事業
関写真集を翻刻したものである。これらの写真は、同じく木曾教育会に保存される二冊の「島
崎藤村先生木彫像制作過程写真」同様、中西悦夫(木曾教育会役員)によって撮影されたもの
である。木曾馬の制作工程の写真は、石井鶴三の木取り法と対概念となる「心棒」の論理を検
証する上で欠くことのできない重要な資料である。

【書誌】

底本 木曾教育会蔵本

『開田村西野に於ける石井鶴三御制作の「木曾馬」関係の写真集』 一冊

表紙 和紙 本文共紙 縦一六〇mm 横二四二mm

外題 表・開田村西野に於ける石井鶴三御制作の「木曾馬」関係の写真集

木曾教育會 26.6.7～26.6.15

内題 表・無 裏・無

丁数 十七丁(表・裏表紙を除く) 右開き

備考 写真集冊子において、図版はその四隅部分を各ページの切込みに差し込む形で留めら
れている。翻刻版では、差し込まれて見えない状態は再現していない。

【凡例】

- 一 翻刻に際して、一頁毎一枚写真数、表題文字の配列と大きさ、図版の縦横など、おおよ
そ底本の体裁に従った。
- 一 図版については、すべて底本に綴じられている紙焼きプリントからデータを得た。
- 一 底本には図版番号は附されていないが、翻刻版では通し番号を附した。

*本稿は科学研究費補助金(基盤研究C・課題番号:18K00118)による研究成果の一部であ
る。

開田村西野に於ける
石井鶴三先生御制作の
「木曾馬」関係の写真集

木曾教育会

26.6.7 ~ 26.6.15



© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084



© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084



© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084



© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084



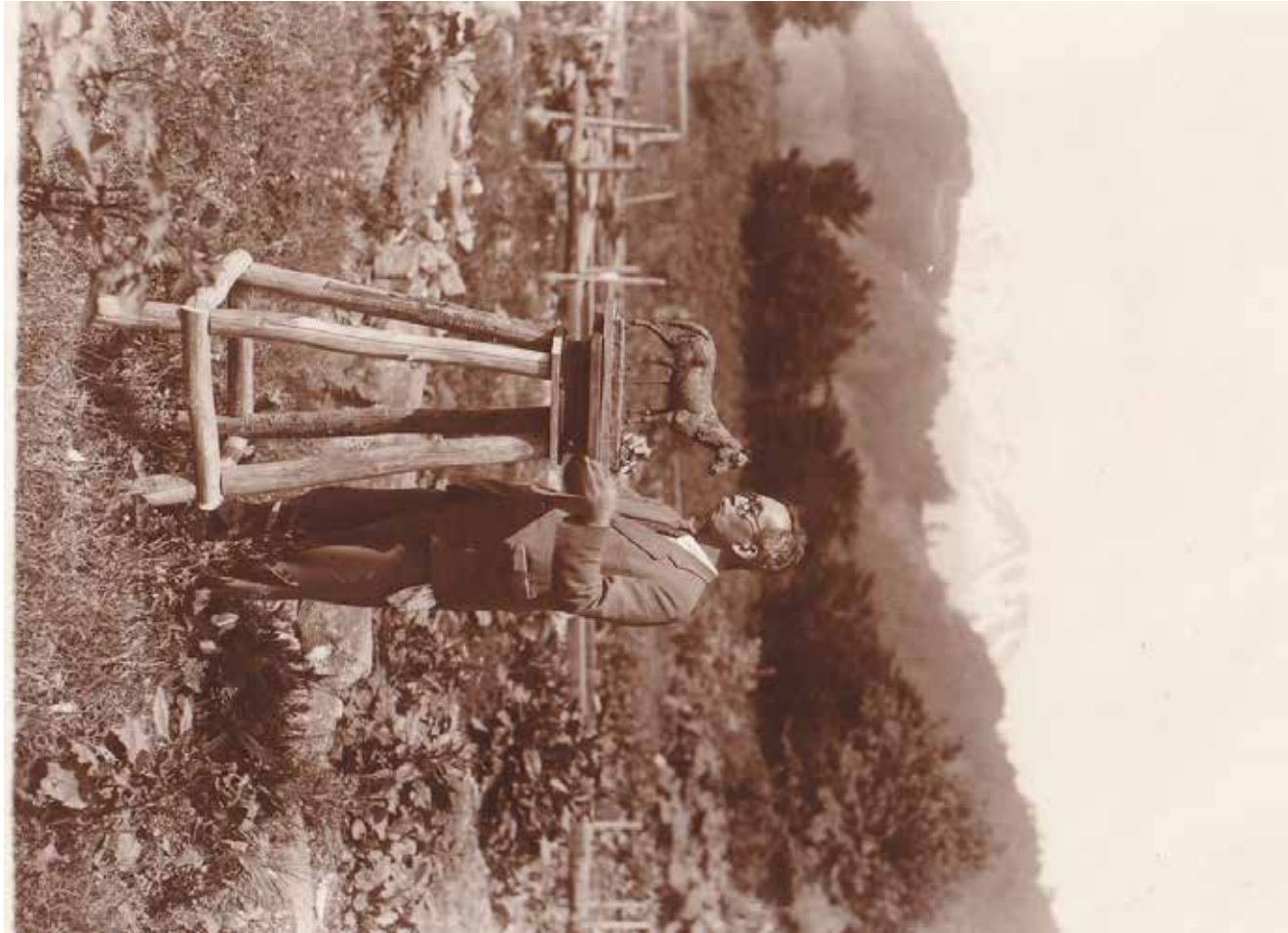
© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084



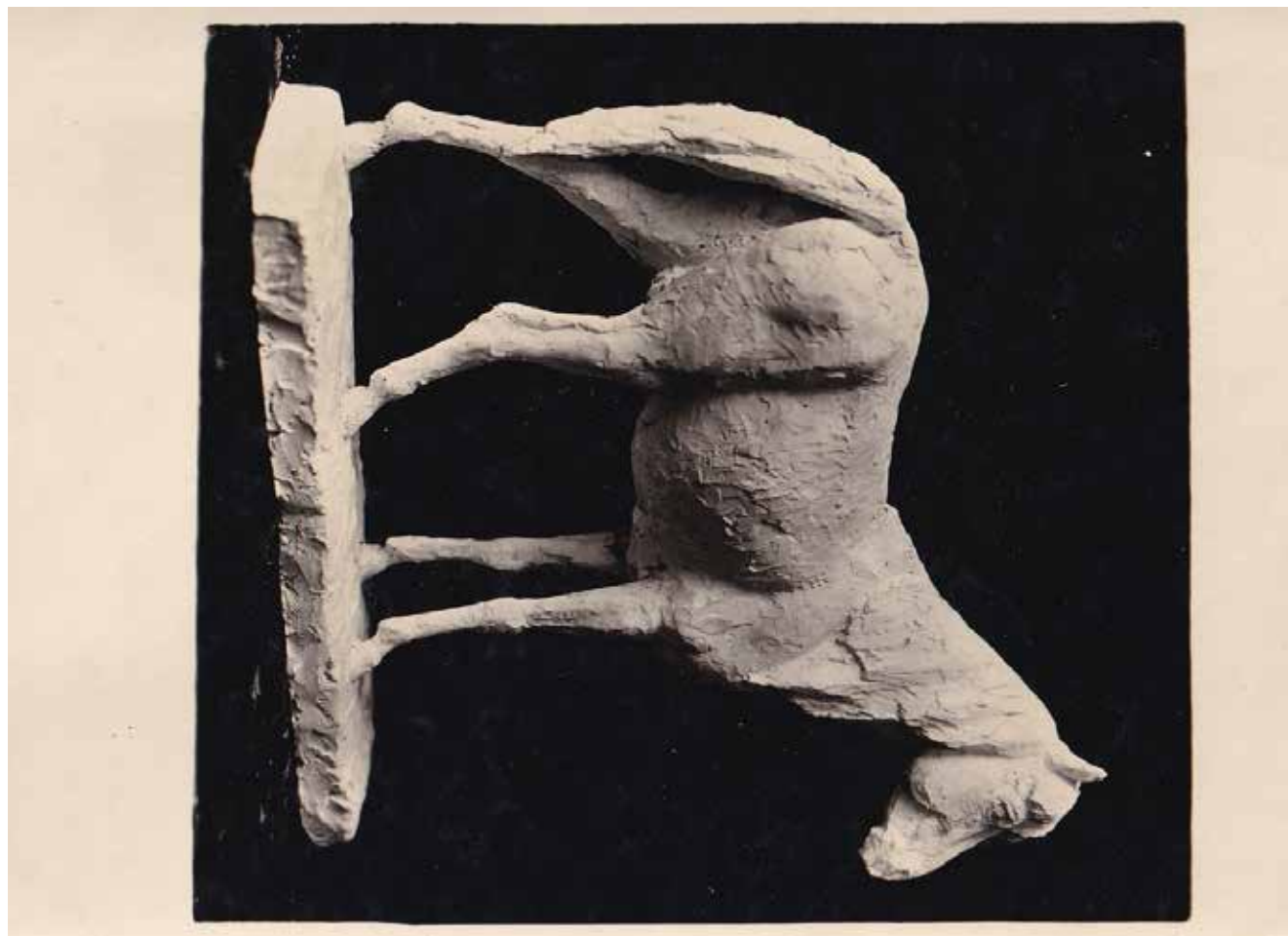
© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA210084



© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084



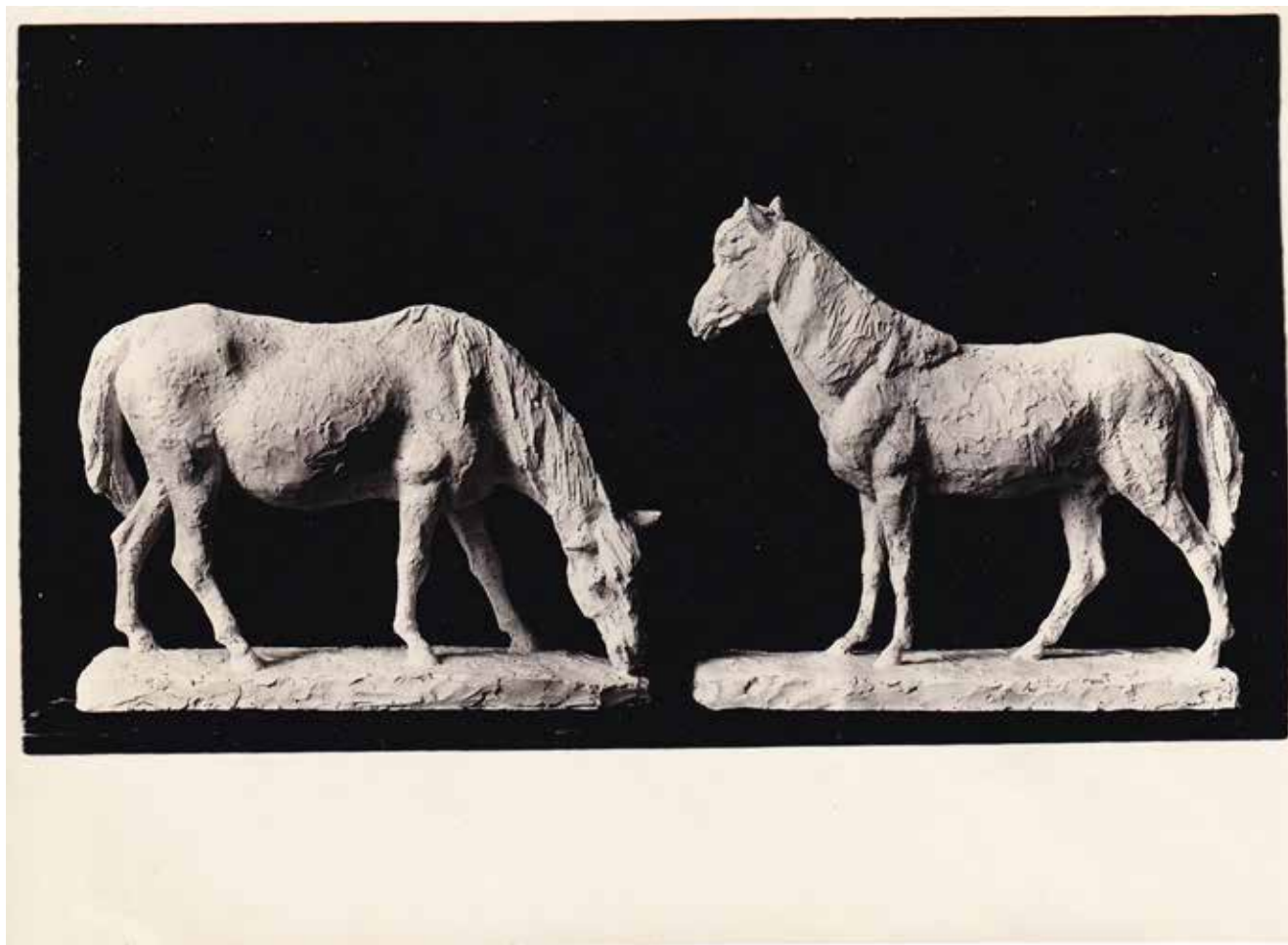
© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084



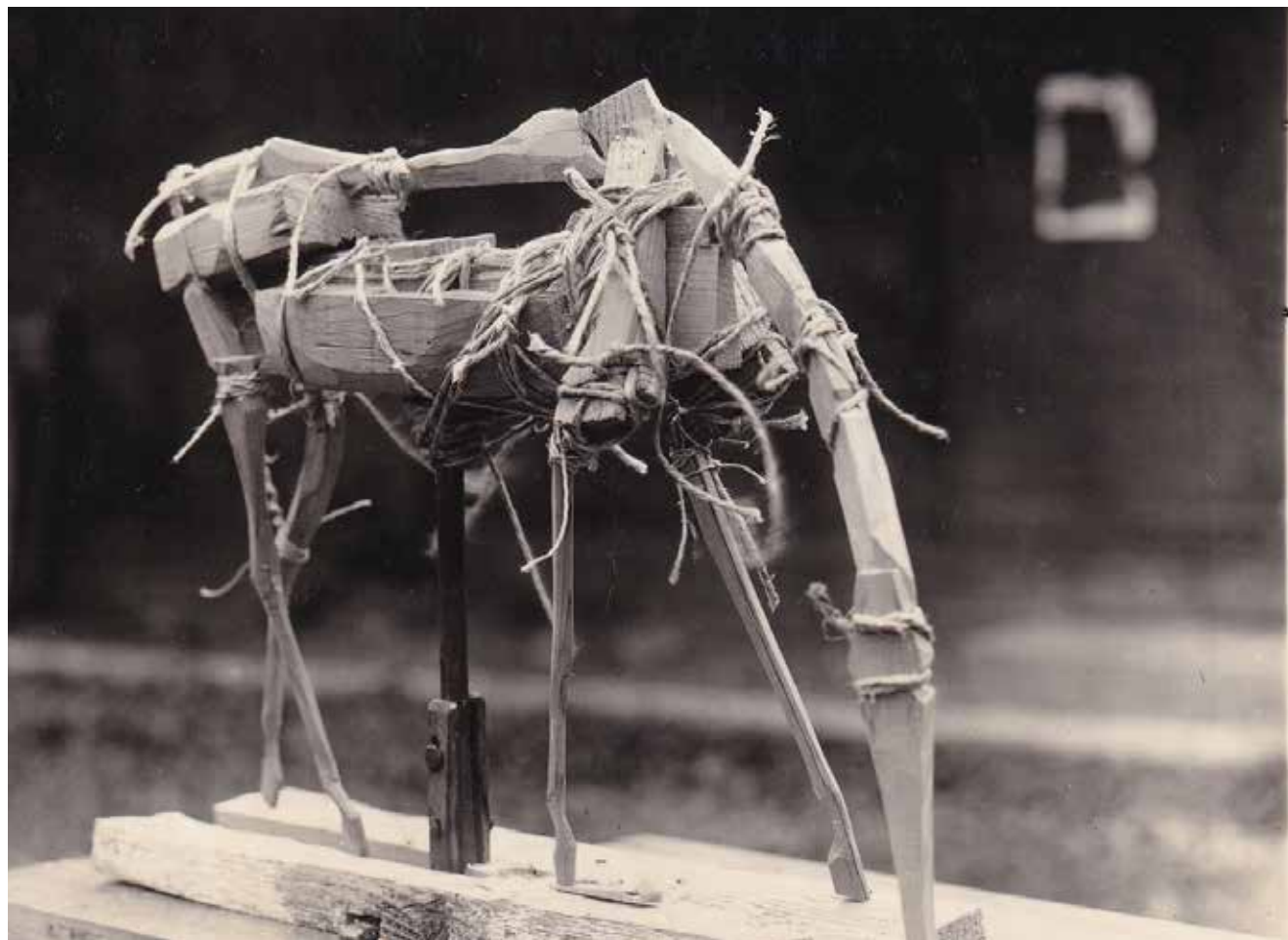
© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084



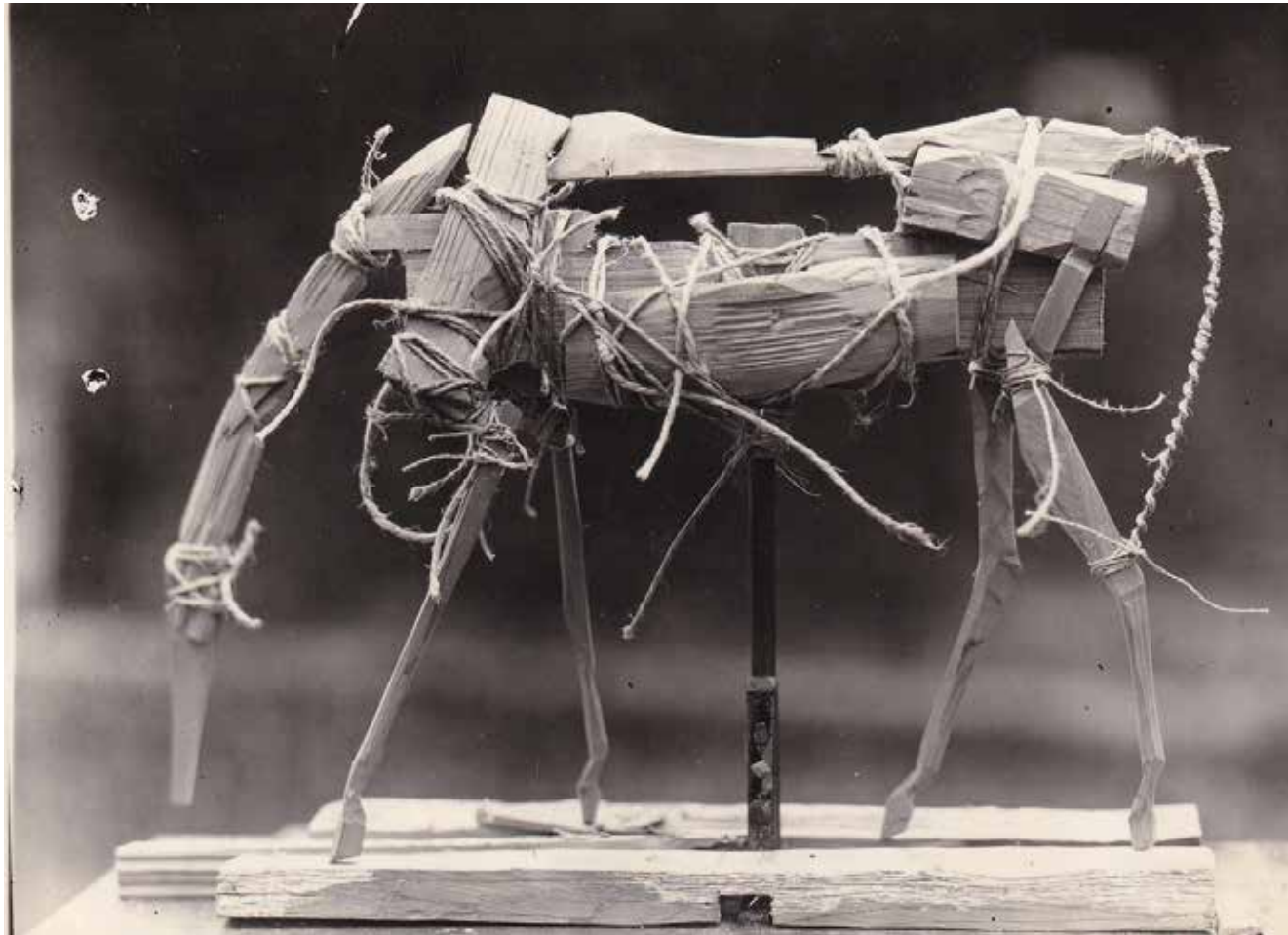
© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084





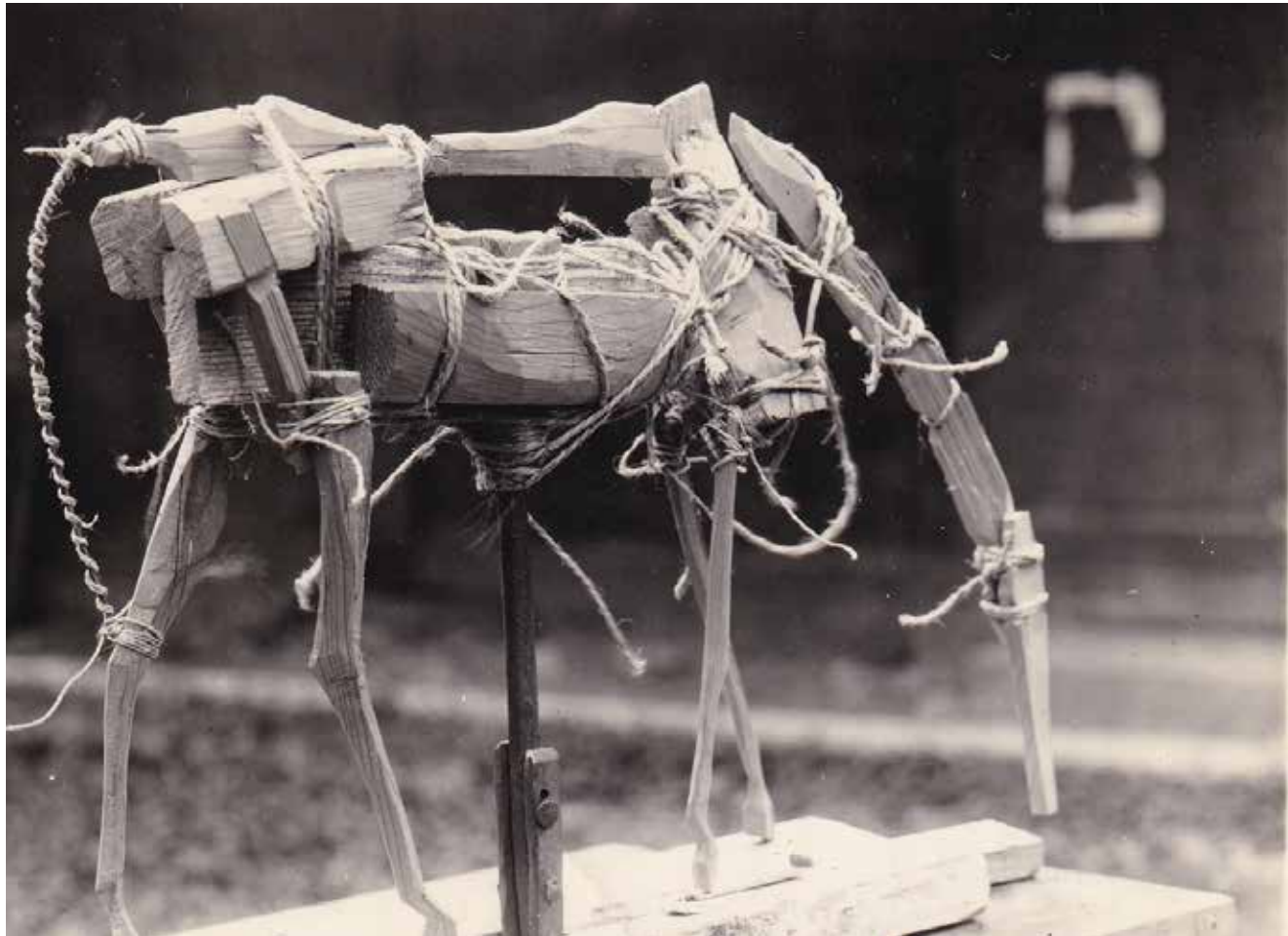


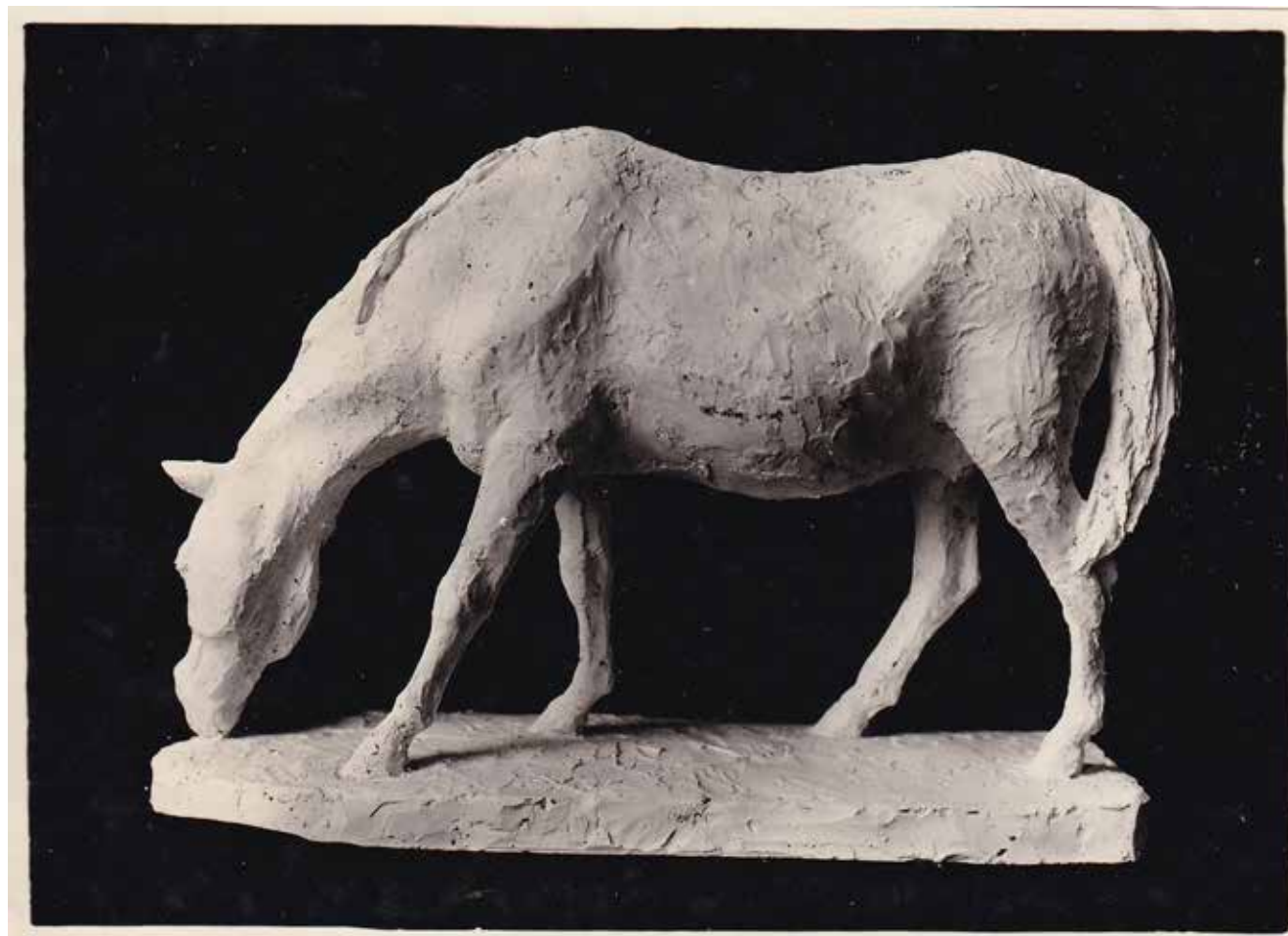
© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084





© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084





© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA210084

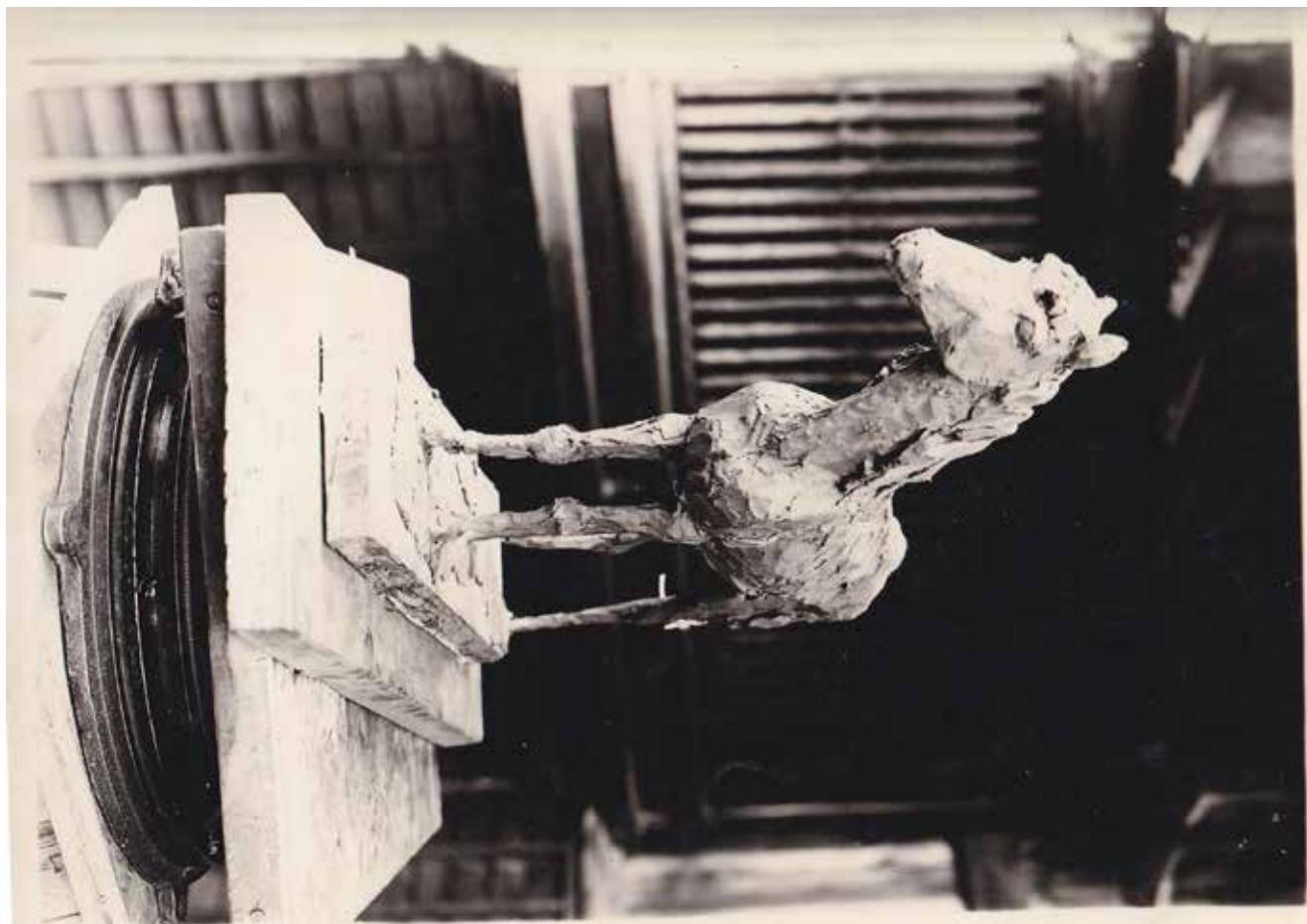


© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084



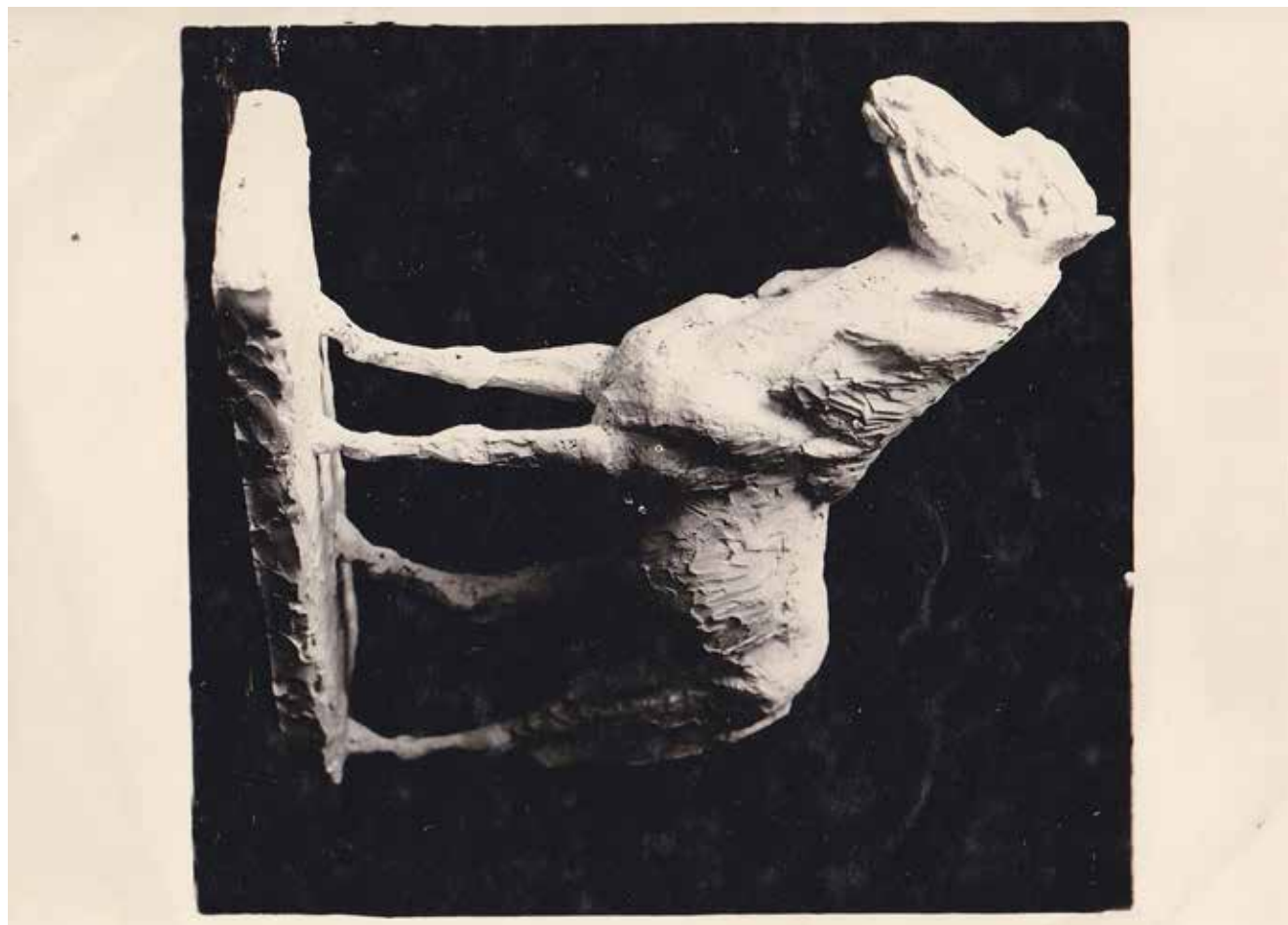
© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084





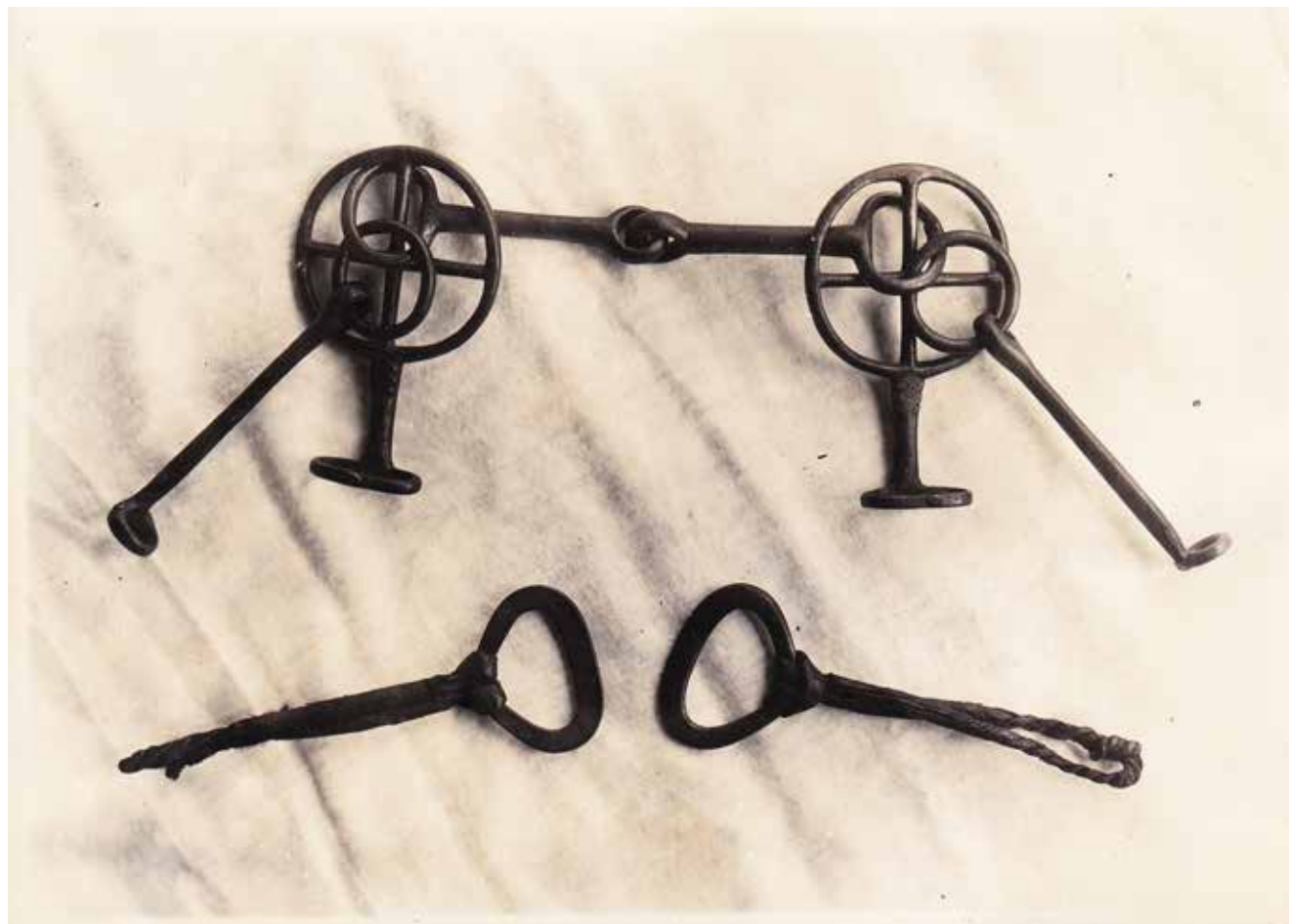
© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084





© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084





© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084



© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084





© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084



© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084



© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084





© Keibunsha, Ltd. 2021/JAA2100084



【解説】

木曾馬像の心棒とその近代性

『開田村西野に於ける石井鶴三御制作の「木曾馬」関係の写真集』(図1)は、一九五一年六月八日から六月十五日までの八日間に、二体の木曾馬像が成った制作事業を記録したものである。撮影者は、石井鶴三の木彫代表作「島崎藤村先生像」(藤村木像)⁽¹⁾の記録と顕彰に努めた、木曾教育会役員の中西悦夫である。写真集は、一ページ毎にキャビネサイズの写真一枚というコンパクトな和紙手作りである(図2)⁽²⁾。藤村木像の場合と異なり、写真は時系列に整理されて



図1 「木曾馬」関係アルバム表紙 木曾郷土館



図2 アルバム見開き12頁・13頁

ているわけではないが、当時の制作の様子を開田村の風景とともに今日に伝える貴重な資料である。現在、木曾郷土館(木曾教育会)には、藤村木像関連資料およびブロンズに铸込まれた《木曾馬Ⅰ》(藤島号)、《木曾馬Ⅱ》(神明号)がこの写真集とともに保管されている。

木曾馬像の制作は、藤村木像の制作のため木曾を訪れ始めた一九四九年以降、石井の中に強く芽生えたもののようなものである。もともと、自身の生い立ちとの関係もあって、馬に深く愛情を抱いてきた石井が、当地で木曾馬に心惹かれていったのも当然の成り行きだった。直接的には、昭和二五年の夏、石井が木曾を訪れた際に開田まで出かけ、二三の典型的な馬を見たのが動機となっている。

この十余年、藤村像の調査を進めている筆者は、藤村像のスピントフ的な制作である木曾馬像にかねてより関心を抱いていた。ところが、二〇一九年に制作現地に赴き、木曾馬像の背後に今も脈打つ木曾人と馬との物語を知るに及び、単なる関心の次元を超えて、強く胸を打たれる感動を覚えることとなった⁽³⁾。

木曾馬像の制作経緯を『木曾教育』に記録する陶山光男によると、石井は制作にあたって「一生のうち純粹の日本馬の彫刻をしたいというのが私の念願でもあった」と強い語り口で述べ、歓迎の席に集まった関係者一同に感銘を与えたという⁽⁴⁾。それは、木曾馬像の制作が、幼い時分の馬との関わりに根ざす石井生涯の悲願であることへの共感によるものである⁽⁵⁾。しかしながら、開田村は、石井個人の馬との結びつきをも超える、人と馬の営みが息衝く稀有の地である。石井が人々の感動を誘ったのは、むしろ石井の側にこそ、木曾人の営みへの敬意があったからに違いない。

そうした心をもって現地を訪れた石井の出会った馬が、種馬統制法のもとで絶滅に瀕していた

純血馬のうち、去勢を免れた唯一の雄馬「神明号」であったことは、単なる偶然とは思えない。むしろ選ばれたのは石井の方なかも知れない。神明号の一頭の身に掛かった純系木曾馬の存亡の運命について、筆者は語る資格を持たないが、神明と石井鶴三との巡り合わせこそを一期一会と言うのであろう。戦中、長野県更埴市八幡の武水別神社に御神馬として奉納されていた黎明号（後の神明）が、畜産組合関係者の熱心な働きかけにより新開村黒川に帰ってきたのが一九五〇年であった⁽⁶⁾。その年、石井は八月の他に十月にも藤村像の制作で木曾を訪れているが⁽⁷⁾、木曾での制作事業の本務である藤村像の第二作に着手したばかりであり、かつ十月にもなれば開田高原ほどの寒冷地では、屋外での制作活動は困難だったと思われる。翌一九五一年が木曾馬像の制作年であるが、同年四月は神明の子で、木曾馬復元に多大な貢献をした第三春山号が誕生している。神明号のその後については、あまり芳しい活躍がなかったのか、種雄馬としての任務をいつ終えたのかも明確ではない。山下一平に押さえられながらも、首を振って荒ぶる元気さ（写真5）も長くは続かなかったのかも知れない。「精悍で、丁度鎧武者の乗った馬の感じ」⁽⁸⁾と石井が評した神明号と出会える機会は、おそらく一九五一年六月が最も良いタイミングだったのではないだろうか。穏やかに草を食む藤島号と対を成すかのように、気丈に首を高く上げる神明号が実物に基づく彫刻として残されたことは正に奇跡と言う他ない。

石井の仕事は、その心棒を見れば一目で分かる通り、完成度の高さにおいては、ただ感嘆するばかりである。これが、構造体の論理として語ることでできる藤村像の基本形と対を成す心棒の論理である。剥製として残された第三春山号と異なり、資料の少ない神明号にとって《木曾馬Ⅱ》は、その在りし日の姿を今日に伝える唯一のポートレイトなのである。これは、藤村像（第一作）の石膏原型である《藤村先生像試作》（一九四三）が、島崎藤村の生前の姿を捉えた唯一の肖像であることを思い出させる。そして《藤村先生像試作》もそうであるように、生動する骨格を捉えた造形は、実寸を超えて原寸大のスケール感を発する⁽⁹⁾。つまり、粘土の肉付けは物理的な形を超えて、空間的に立ち現れてくるのである⁽¹⁰⁾。このスケールと空間とに関わって、元松本教育会長の川口五男人が書いた体験は興味深い。「ある晩のことであった。私たち数人は山下一平さんの家のあまり明るくない電灯の下で、石井先生が板の上にのせた半ば完成に近い牝馬の塑像を回してみてもらえるのをいっしょにみていた。いつのまにか話し声は消えて二、三十分間みんな無言になってしまった。その時のことである。突然大きな生きた馬が私の眼前に立っている。私は「はっ」とした。もちろんそれは私の錯覚であったが、あの時の衝撃の感動の情景はいつまでも眼底に焼き付いてはなれない」⁽¹¹⁾。

個人的な話題で恐縮だが、バリのポンピドーセンターを訪れた時のことである。日本ではあまり知られていない、あるキュビズム系の彫刻家の馬の作品を見ていたところ、私の同伴者は突然、川口と同じような感覚に襲われ、その場を飛びのきそうになった⁽¹²⁾。もちろん、彫刻は動いていない。しかし鑑賞者の体験は紛れもなく当人にとっての事実である。川口の体験談は木曾馬像がキュビズムとも比較できる近代性を帯びていることを示すエピソードと言えるだろう。

西洋で起きた革新的な芸術ムーブメントと木曾馬像の制作とは、その世界観に隔絶の間は否めない。しかしながら、藤村木像に対し、イサム・ノグチが「キュビズム」、「セザンヌ」との言葉で評価したことは、その当時の石井の周辺では大きな話題となっていた。もつとも、作者石井本人は、こうした美術様式上の問題は意識になかった。何枚かのスケッチを描いた後、用意して

あった樞の木で心棒を組み始めた。「細く削っては紐で縛り、又ほどこいては削るといふ」作業を繰り返して、非常に苦心して心棒を成した。弟子の笹村草家人は「この骨組みによって完成の形がきまってしまう」^(一三)とその重要さを陶山に説いた。

陶山は、牡牝二頭の木曾馬が「石井の手によって永遠にその姿を残すこととなった」^(一四)と自身の一文を結んでいる。石井の思い、現地の人の思い。人と馬との営みの歴史がわずか八日間の内に込められてなった希代の彫刻が木曾馬像である。ただし、その永遠の姿とは、形として固定された馬のイメージではなく、常に生きて動く体験性のことであり、そしてそれゆえ、その作品に触れる幾世代の人々の心を打つものとなるのである。

【解説注釈】

注一 石井鶴三の制作による島崎藤村の像は、石膏原型と木彫合わせて四体が作られている。木曾教育会の木曾郷土館には、木彫第一作目(第一作)および木彫第二作目(第二作)の石膏原型が保管されている。ちなみに、第一作の原型である《藤村先生像試作》(一九四三)、木彫第二作は東京藝術大学に所蔵されている。

注二 当翻刻資料は、アルバム原本の構成や配置を復元している。アルバムは右開きで、各ページにはキャビネサイズのモノクロプリントが一枚ずつ貼られている。各写真のネガは大判のガラス乾板であり、これらは、一枚一枚、ガリ版によってフォーマットが刷られた薄紙の袋に入れられ木曾教育会に保管されている。

注三 福江良純、石井鶴三と木曾人の奥行き——木曾馬神明号制作に関わって——、『信州大学附属図書館研究』第九号、信州大学附属図書館(二〇二〇)、九七—一〇四頁。

注四 陶山光男、「木曾馬の誕生」、『木曾教育』第四十二号、木曾教育会(一九七四)、一三四—一三五頁。

注五 石井鶴三が、彫刻の原体験を振り返るたびに語られるのは、少年時代、養子に出された先で出会った馬のとの触れ合いである。馬の体の面白さに覚えた感動について、石井は、後に彫刻の本質と明言する「立体感動」と同じであると述べている。

注六 神明号が木曾に戻ってきた月日の詳細は不明であるが、一九五〇年一月二十四日以降であることが当時の通信記録から判断できる。原文子、『木曾馬のきた道』、自费出版非売「図書(二〇〇七)、一二五頁。

注七 石井の日記によれば、九月三〇日の夜に奈良井に到着。翌日から制作に取り掛かり、一〇月八日の午前一〇時半過ぎに諏訪に向けて発ったとある。『石井鶴三日記』第三卷、形文社(二〇〇五)、三〇六—三〇七頁。

注八 前掲陶山、一三七頁。

注九 笹村草家人、「木曾と石井鶴三」、『木曾教育』第四十二号、木曾教育会(一九七四)、一一九頁。

注一〇 石井は一九六四年一月十六日、木曾教育会で行われた「たくましい日本の造形力と題された講演会後、おそらくは藤村木像を前にして、「造型」というのは、単にこここのところのものをこしらえるのではなく、ここの中に込められた一種の不思議なものです。そこから、こう、不思議なものが動いてきて、空間に立ち込めるといふ感じですね」と語っ

注二一 川口五男人、「藤村像」一体と木曾馬「二頭を木曾で制作された石井鶴三先生」、『信濃教育』第一〇四四号、信濃教育会（一九七三）、八四頁。

注二二 二〇一八年八月二七日。筆者と同伴者は、パリのポンピドゥーセンター内で、Raymond Duchamp - Vilion, "Le Chavel majeur" (1914-1915) (参考図1)を見ていた。作品タイトルからそれが馬の造形であることが分かり、形態要素が部分的に見え始めた次の瞬間、その同伴者には、突然馬が猛々しく突進し始め「危ない！」と身の危険を覚えた。これを幻覚として片付けることは簡単であるが、川口の体験談と併せるなら、我々の認識システムに潜在する能動的な働きについて考えさせられるものがある。

注二三 前掲陶山、一三五頁。

注二四 前掲陶山、一三七頁。

【資料】



参考図1 "Le Chavel majeur" (1914-1915)

作品右端上部にかぎ型に曲がっているのが、馬の鼻先である。くの字に折れた本体の上下を斜めにつなぐようなクランクシャフトが確認できる。これらが、一瞬、体験的にはマシンのごとく動き始めたのである。(図版筆者撮影)

番号	撮影日	サイズ	備考
24	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅱ》石膏原型
25	1950.6.●	11.7 × 16.1	くつわ
26	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅱ》粘土石膏
27	1950.6.7	11.7 × 16.1	山下はつと泥月毛
28	1950.6.8	11.7 × 16.1	心棒を組む鶴三
29	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅱ》粘土石膏
30	1950.6.7	11.7 × 16.1	山下はつと泥月毛
31	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅰ》石膏原型
32	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅰ》石膏原型
33	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅱ》粘土石膏

*各図版の撮影日は、画像内容から推定したものである。

*陶山光男の記録、石井鶴三の日記から特定できる木曾馬像の制作工程は以下の通りである。

6月7日 石井鶴三一行、山下家到着
《木曾馬Ⅰ》

8日午前：スケッチ・心棒 午後：粘土肉付け

9日～11日：制作・完了 12日より千村による石膏型取り作業
《木曾馬Ⅱ》

12日：スケッチ・心棒 粘土肉付け

13日～15日午前：制作・完了

【謝辞】

木曾教育会の事務局長梶原博雄氏並びに事務局職員の方々には、木曾馬像関係写真の調査と本稿執筆に御協力を賜った。ここに記し、感謝の意を表す。

「木曾馬」関係の写真集図版データ（サイズはcmで表記）

番号	撮影日	サイズ	備考
1	1950.6.15	11.7 × 16.1	最終日前記念写真
2	1950.6.15	11.7 × 16.1	最終日昼食？
3	1950.6.7	11.7 × 16.1	山下はつと泥月毛
4	1950.6.●	11.7 × 16.1	藤島号と鶴三
5	1950.6.7	11.7 × 16.1	山下一平と神明号
6	1950.6.7	11.7 × 16.1	藤島号を見る鶴三
7	1950.6.7	11.7 × 16.1	記念撮影 到着日？
8	1950.6.15	11.7 × 16.1	最終日の制作
9	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅱ》石膏原型
10	1950.6.7	11.7 × 16.1	山菜を持つ鶴三 到着日？
11	1950.6.●	11.7 × 16.1	2体の石膏原型
12	1950.6.●	11.7 × 16.1	開田村風景
13	1950.6.8	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅰ》心棒
14	1950.6.8	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅰ》心棒
15	1950.6.8	11.7 × 16.1	心棒を組む鶴三
16	1950.6.8	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅰ》心棒
17	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅰ》石膏原型
18	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅱ》石膏原型
19	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅱ》粘土石膏
20	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅱ》粘土石膏
21	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅱ》粘土石膏
22	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅱ》粘土石膏
23	1950.6.●	11.7 × 16.1	《木曾馬Ⅱ》石膏原型